

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会会）

教育部会名：歴史と文化
部会長名：高田京比子
作成者名：高田京比子

概要（2000字）

実施体制

本年度の歴史と文化教育部会は、人文学研究科の日本史学、西洋史学、東洋史学、美術史学に所属する計14名の教員、国際文化学研究科のアジア・太平洋文化論、日本学、ヨーロッパ・アメリカ文化論のうち歴史を専門とする計4名の教員、同じく国際文化学研究科の比較文明・比較文化論で科学史を専門とする2名の教員、人間発達環境学研究科人間発達専攻表現系講座に所属し近代建築史、西洋音楽史・音楽美学、音楽民族学、ファッション文化論・表象文化論を担当する計4名の教員から構成されている。これに考古学2名、日本史3名、西洋史1名、アジア史1名の非常勤を加えて、日本史・西洋史・アジア史・歴史と現代・芸術史・科学史・考古学の7科目、27コマ（前期14、後期13）の授業を提供した。

現状と評価

①教育内容

シラバスを見れば、扱う対象は、古代ギリシアから、現代中国、あるいは戦国時代の日本など時代的にも幅があり、また地域を取ってもヨーロッパ、インドネシア、中国、日本とバラエティに富んでいることがわかる。また狭義の歴史だけでなく、「数学の歴史」や「色彩と文化」など、広く歴史に関わる文化的な内容が用意されている。このように、当部会の提供する教育内容は、教員数相応に幅広い分野にわたっており、受講生の多様な関心に答えることができる。また、当部会の科目は、全てグローバル関連科目に指定されているが、本学のグローバル人材育成推進事業が目指す二つの能力、「多様な価値観を尊重する」「異文化・日本文化を深く理解する」にも、よく合致する内容である。

②教育方法

授業の形態は講義形態が主流であり、200名近い学生を対象としている場合もあるが、授業アンケートでは、概ねよく理解され有益であったと回答されている。また多くの教員が、小テストを行い、単位の実質化、小まめな学生の理解度把握に努めている。比較的少人数の授業では討論を行ったり、コメントペーパーを活用したりして、学生と双方向的コミュニケーションを図るよう努力が行われている。

成果

自己点検・評価に基づくほとんどの教員が、授業評価アンケートや試験答案に基づいて学習成果が上がっていると判断している。自己評価で「いいえ」を回答した教員も、授業評価アンケートでは四捨五入すれば総合評価平均4になり、客観的に見れば、一定程度の成果が上がっていると判断できる。

また今回、歴史と文化教育部会では外部評価を受けることになり、それに向けて独自に学生に記述式の授業アンケートを行った。その結果、学生の回答例は、当部会が提供する授業が何よりも、「異なる時代」の文化に触れ、時代によって変化する人間の思考の枠組みに敏感になることを促している、ということを彼らがしっかりと理解していることを示していた。しかし、このアンケートは、同時に、時代背景をどの程度説明するか、学生

の既得知識の差をどのように処理するか、という長年にわたって歴史と文化部会が抱えている問題が、なお十分解決されていないことも示している。歴史と文化教育部会の科目は高校の「世界史」「日本史」の知識をある程度前提とせざるを得ないところがあるからである。例えば、個々の教員によるアンケート結果のまとめの中には「内容が専門的すぎるとの指摘もあり、前提となる知識を身につけるための授業の進め方に配慮する必要があったのではないか、という点は反省点である」「前提知識の差を埋めるために、小テストなどを使った工夫をする必要があるかもしれない」「受験で日本史を選択していないため難解であり、ゆっくり丁寧に説明してほしいという要望がある一方で、高校時代に学習したこととの重複が多くつまらなかつたという意見もあった。これについては、やはり知識量が少ないこと（受験科目に選択されていないこと）を前提とせざるを得ないだろうが、あらかじめ基本的な参考文献を指示して読ませておくなどの改善は必要であろう。」などの意見が見られる。これらの意見を個別の授業内部に止めず、部会全体で共有し話し合う場が必要であろう。なお、外部評価委員会では、委員の先生から、シラバスを見る限り、現在の歴史と文化教育部会の授業内容は、研究の一端を披露するという性格が強いものが多く、それは大変大事なことであるが、同時に「大学教育でこそ、定型化された知識を身につけさせ、（歴史についての）バラバラな像をまとめるすべを明示的に学ばせることが急務になっている学生が少なくないはず」「もう少し長期にわたって、当該分野、関連分野を概観する導入的授業も必要ではないか」という指摘を受けた。つまり歴史の知識は教養として必ず必要なものであり、それらを体系的に身につけさせる役割も歴史と文化教育部会は担うべきではないかという指摘である。

来年度からクォーター制に移行するため、「長期にわたって」「知識を身につけさせて、バラバラな像をまとめる」ことは、ますます難しくなる。クォーター制が教育の内容にどのような影響をもたらすのか、それに部会としてどのように対処していくのか、次の2年で考えていかねばならないだろう。

教育部会用自己点検・評価シート（様式1）

項目・観点ごとの記述

基準5 教育内容及び方法

5-1 【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。】

5-1-③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

観点に係る状況（150字以上）

担当教員の全員から「はい」との回答を得ている。またシラバスや歴と文化教育部会で独自にとったアンケートによれば、個々の教員が最新の研究成果に注意をはらいながら授業を組み立てていることがわかる。用意されている授業は内容も多様なものであり、学生はそこから自分のニーズに合わせて授業が選択できるようになっている。

根拠資料

シラバス。授業中の配布資料

5-2 【教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。】

- 5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

観点に係る状況（150字以上）

歴史と文化教育部会においては、基本的に講義形式で授業を行っている。そのなかでも例えば、授業中に質問票を実施してそれに対する回答を逐次実施したり、考古学では現物を回覧したり、さまざまな工夫が行われている。また討論を主体とする授業では毎回本を読ませて確認で文章を書くという作業も取り入れており、全体として講義ばかりにならないような配慮がなされている。

根拠資料

シラバス・授業中配布のプリント資料・講義時に回覧した実物資料、パワーポイント、講義メモ

- 5-2-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。

観点に係る状況（100字以上）

すべての教員が「はい」と答えている。小テスト、授業中の質問票、参考文献を利用したブックレポートなど、学生の主体的学習を促し、単位を実質化する配慮がなされている。学生のアンケートの中には、ブックレポート用の読書をより一層じっくり取り組むべきであったなどという積極的回答もあった。

根拠資料

シラバス、小テスト解答用紙、参考図書一覧

- 5-2-③： 適切なシラバスが作成され、活用されているか。

観点に係る状況（50字以上）

すべての教員が、「はい」と答えているが、学生のアンケートによると、シラバスそのものをよく読んでいないとする者もあり、単にウェブ上に掲げるだけではなく、講義としてシラバスの内容やそこに記載の到達目標、目的や計画など時間を割いて解説周知する必要があったのではないかという反省もあった。

根拠資料

シラバス

- 5-2-④： 基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

観点に係る状況（100字以上）

この点は概要でも書いた通り、歴史と文化教育部会にとってもっとも難しい問題である。各教員はもちろん「世界史」や「日本史」をとっていない学生に対しても配慮して講義を組み立てているが、それでも説明が不十分と感じる学生がいたり、反対にすでに知っている知識を与えられる時間が退屈と感じる学生がいたり、ということが起こっている。

根拠資料

学生アンケート

- 5-3 【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、

成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっていること。】

5-3-②： 成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

観点に係る状況（100字以上）

総じてシラバスではどのような基準で成績を評価するかということが、明示されており、それにそって成績評価が行われている。小テストを行っている授業も多いが、そこでは、ほとんどがその配点、比率などについて明示している。

根拠資料

シラバス、小テスト答案、期末テスト答案、

5-3-③： 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられているか。

観点に係る状況（100字以上）

上でも述べたように、シラバスでは、成績評価の際に、出席点、小テスト、期末テストなどをどのような比率で用いるか、ということが明示されており、客観性・厳格性を担保する措置が講じられている。また授業中にも適宜、成績評価についての情報が周知徹底されている。

根拠資料

シラバス、小テスト答案、期末テスト答案、

基準6 学習成果

6-1 【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。】

6-1-②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

観点に係る状況（100字以上）

ほとんどの教員が、授業評価アンケートや試験答案に基づいて学習成果が上がっていると判断している。自己評価で「いいえ」を回答した教員も、授業評価アンケートでは四捨五入すれば総合評価平均4になり、客観的に見れば、一定程度の成果が上がっていると判断できる。

根拠資料

学生アンケート、試験答案

基準7 施設・設備及び学生支援

7-1 【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。】

7-1-④： 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

観点に係る状況（50字以上）

共通教育部門において個別ブースを備えた自主学習室が整備されているほか、本教育部会メンバー教員の所属部局それぞれにおいて、近年、ラーニングコモンズやグループ学習室が整備され、ハード面での自主的学習環境は充実傾向にある。

根拠資料

附属図書館、大学教育推進機構の自習室、各部局のラーニングコモンズ等

7-2【学生への履修指導が適切に行われていること。また、学習や課外活動等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること。】

7-2-①： 授業科目のガイダンスが適切に実施されているか。

観点に係る状況（100字以上）

すべての教員が「はい」と回答している。シラバスでは授業の内容がよくわかるように、授業のテーマと目標、授業の概要に分けて記されている。またそれに加えて概ね、初回の授業において、授業内容の確認が行われているようである。

根拠資料

シラバス

7-2-②： 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。

また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

観点に係る状況（100字以上）

すべての教員が「はい」と答えている。シラバスにはオフィスアワーが明示されており、学生がコンタクトをとれるようになっている。根拠資料として、オフィスアワーの記録やメールのやりとりをあげている教員もおり、個別の学生のニーズに応じていることがわかる。

根拠資料

オフィスアワーを実施した記録、メールのやり取り